

大宜味村謝名城の住居習俗

桃原茂夫*

Folkways of Dwellings in Janagusuku, Ogimi Village, Okinawa

Shigeo TOBARU*

1 謝名城の位置と歴史



図1 謝名城の位置と地図

大宜味村字謝名城は、那覇から約93キロメートル北にある山原の村である。東シナ海側を北上し、喜如嘉部落から東に約10分、喜如嘉小学校を越えたところにある。集落は、根謝銘グスク（標高115m）の南西から根謝銘川沿いに展開し、木材や竹類の山林資源には恵まれているが、水田は少なく、畑も段々畑である。そのため、戦前から大宜味ゼークとよばれるほど出稼ぎが多かった。人口は、1968年12月現在、446人（男191、女255）、世帯数106であるが、本籍人口が958人であるから過疎化に変わりはない。

謝名城は、もともとインジャミ（根謝銘）、テンナス（一名代）、グスク（城）と三つの別々の村であった。明治36年に合併し、各字は小字になり、小字名から一文字ずつとって謝・名・城と名付けた。小字根謝銘は、ガナ

ンハナ山の麓、根謝銘川にそって、共同店や公民館等もあり、謝名城の中核をなす。小字一名代のナスは、苗代を意味し、低い平地の水田地帯を前にしている。根謝銘川の下流域には広い水田地帯（喜如嘉ターブックワ）が開けている。小字城（グスク）の集落は、共同店の右手から、旧道の急な細道を登っていく。隣字の田嘉里に通じるネザメクビーという切り通しを左に見ながら、右手に登ると古木や岩石の多い小字城に着く。途中、西下をふり返ると小字根謝銘、小字一名代のたたずまいと、遙か喜如嘉の先に海が広がる。

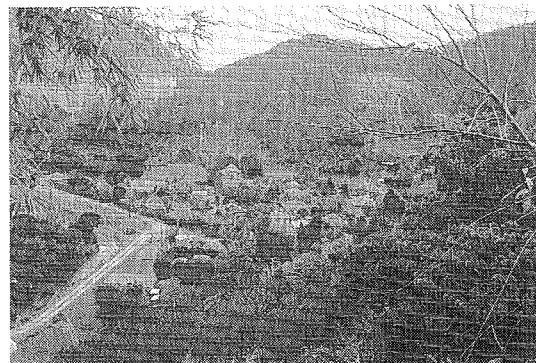


写真1 根謝銘のたたずまい

小字城から東に山道を登り詰めると上グスク（根謝銘城）に至る。ウンガミには、大グスクと中グスクという2つの御嶽や、神アサギ、祠、拝井泉等があり、旧暦7月にウンガミ祭祀が行われる。

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

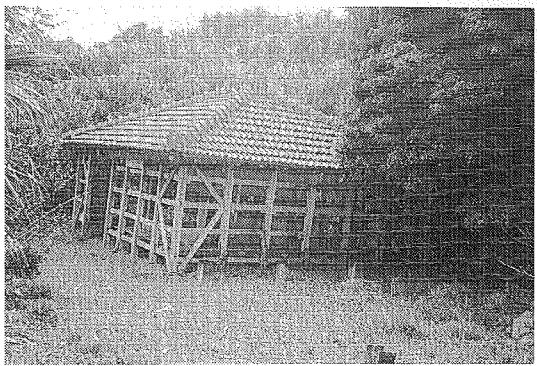


写真2 神アサギ

2 屋敷囲

屋敷囲はカクイといい、生垣が主で、石垣はほとんどみられない。グスクやテンナス後方の斜面にある屋敷では、自然の地形を削って、土壠を築いてあるのが見られる。最近になって、ブロックを積むようになった。屋敷囲いの樹木としては福木、ユシギ、ギンギチ等が多い。屋敷木は、カジゲーシ（風返し：風除け）が目的で植えてあるのだから、特に植えるのを忌む木はないという。福木が防風林として最適であり、最も多く植えられている。ギンギチ（月桂樹）は、枝葉を水田に緑肥としても利用できるという。

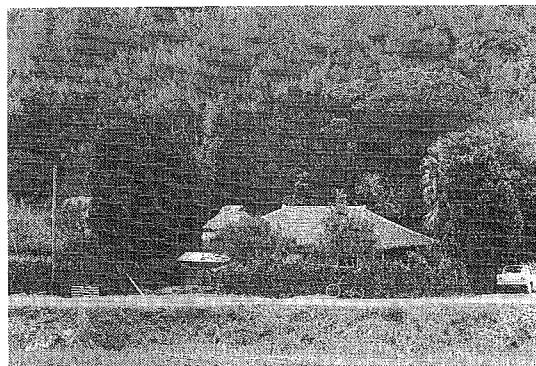


写真3 屋敷囲い

屋敷木で特に古くなった木には拵みをする。屋敷内の木であってもむやみに伐ると、キリキザワイといって、病気や、怪我等のもとになる。キリキザワイで死ぬこともある。屋敷の木は、屋敷の神が大切に守り育てたものであるから伐ると祟りがある。テンナスの屋号タヒニーの金城ハルさん（73歳）の場合は、屋敷木を伐る時や、キリキザワイの時には次

のように拵む。

(1) 屋敷木を伐る時の唱えごと

<唱え言葉>	<対訳>
ウカミヌ	御神が
アタラハヒミソーチ	大切になさって
フルイーラチエーヌ	育てあげられた
ヒーヤイビーシガ	木でございますが
〇〇ガ	〇〇（家主名）が
イリユーサービーンチ	入用したいと
キーヤトウイビートゥ	木を探りますので
イリュー シミティ	入用させて
クイミソーチ	下さって
イチガデーン	何世代も
ユーマチデーニ	世の末代までも
キリキザワイヌ	伐り木障りが
アインディイチエー	あるということも
アラシミソーラングトゥ	あらせられずに
タシキティクイミソーリ	助けて下さい

(2) キリキザワイの時の唱えごと

<唱え言葉>	<対訳>
ウカミヌ	御神が
アタラハ セーミセーヌ	大切にされている
ヒー	木
ユリーン サングトゥ	許しも受けずに
キッチ	伐って
ブリイ ナイビティ	無礼なりまして
ウヌフトヌ ワカラ	そのことを判らず
キッチ	伐って
ウリガ サワイヌ	その障りが
アティスットウ	あつてるので
チューガヒー	今日の日
ユカルヒニ	佳かる日に
クリガブリーヌクトウ	それの無礼のこと
ウサギヤビーグトゥ	祈願をしますので
イチ マチレー	何時 末代
ユー マチレー	世 末代にも
クヌフスクヌクトウヤ	この不足のことは
アラチ クイミセーナ	あらせて下さるな

3 門

門は、ジョウといい、リージン（靈前）の

向いている方向に開けるのがよいとされる。
たいてい、仏壇の正面に開ける。

門に入ったところにはヒンパンがあり、外から歩く人の視線を遮っており、屋内のチラガタハ（顔隠）の役割をしている。

門の寸法は大工がとる。屋敷の角から門をとるのは悪い。

旧盆は、七月十日から御迎えと言ってウザキ（酒）、ウンパナ（花米）を供え、トウブサ（松明）をともし、門からグソー（祖先）に合図する。正月元旦は、門に松竹をたてる。屋敷を借りて住宅とする時は、門から屋敷の内に向かって、「誰それの屋敷を借りて住まいますのでよろしく」と祈願する。

家を建築して、ヤーウチー（引越）の日には、《ジョーイリファジミ》（門入始）の祈願儀礼を行う。ジョーイリファジミ（門入始）は、カリーチュー（嘉例人）を頼む。カリーチュは、家庭が繁栄し、当家の主人とフシ（干支）のあう人の夫婦とその長男で、酒（今は金銭）を持って門から入ってくる。当家人々は、家の中で待ちかまえていて、「嘉例人メンソーリヨ（いらっしゃい）」と招き入れ、嘉例人の持つて来た酒で、嘉例人とサカンケー（酒盛り）をして、ご馳走でもてなす。ジョーイリファジミの日は、嘉例人が来る前に家の拝むべき所は拝んでおく。その唱え方は次の通りである。

〈ジョー入りファジミの唱え言葉〉

フガニジョー・ナンジャジョー・チュクティ、
キユースヒーヤ、カリーナチュガ、ジョウ
イリハジミサビートゥ、ジョーバラヌ、ウカ
ミシ、タシキティ、キミソーチ、ヌヌフス
クン、ネーングウトゥ、クアーンマガ、リッ
シンサカイ、シミティキミソーリ

(黄金門・銀門・作ティ、今日又日ヤ、嘉例ナ人ガ、門入始ミ、サビートウ、門バラ又御神シ、助キミソーチ、何又不足ン、無シグトウ、子孫、立身栄イシミティ、呉イミソーリー)

<大意>

黄金のような門、白銀のような素晴らしい

門を作った今日、嘉例人が門入始めをしますので、門の神様でお助け下さり、何不足なく、子孫を立身、栄えさせてください。

もし、ヤーウチーの日にジョーイリファジミの祈願が出来なかった場合は、別の日に、屋敷又御願をする（屋敷神の項参照）。

4 家屋配置と間取

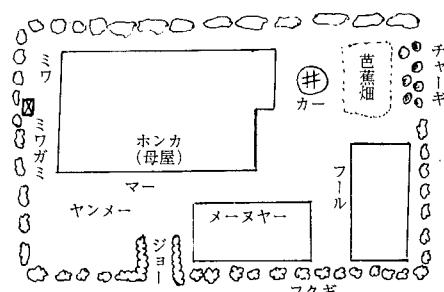


図2 屋号 イーグチの配置図

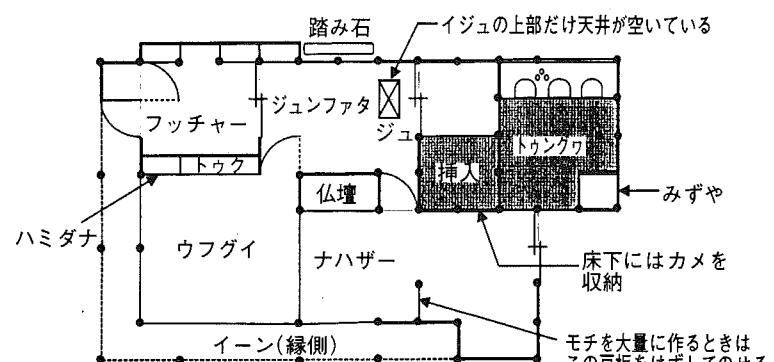


図3 間取図

屋敷内の上手（多くは、母屋の東側）をミワと称し、屋敷の神がいるといって、ジョーヒ（上日：正月等）に拝んでいる。家のタムキ（配置）は、外に向かって座った時、左にミワがあるのがピジャイムケー（左向き）で、右にあるのは、ニギムケー（右向き）という。一名代はほとんどピジャイムケーである。

上座はウフグイ（大庫裏）、中座はナハジャーと称す。

ナハジャーには、仏壇（霊前ともいう）がある。仏壇は、小さい家では三尺、大きい家だと一間の幅でとる。ウフケイには、床の間と神棚がある。床の間は、小さい家でも一間とる。その上手に神棚を作る。神棚は仏壇よ

りも高く作る。

座敷のゆかにはトウマという藁製の敷物を敷いた。また、出入口のゆかには、カマンタとか、シキンタという藁をグルグル巻いた敷物をおいていて、外から入るときの足拭きにした。シキンタは、年寄が座る敷物としても利用した。

縁側は、イン（縁）と称され、特定の富豪の家にだけ見られた。今では、一般の家にも見られる。

昔は、トングア（台所）は別棟であった。トングアの出入り口には、草を敷いておき、出入りのたびに踏みつけてから、畑にすき込み肥料にした。台所は、ジブク（土間）であった。土間は煮炊き用の燃料の屑芥にまみれているので、フクチチ（埃）ともよばれた。

トングアには、たいてい大中小三組のトルハ（竈）があった。

囲炉裏ばたはジュンファタという。今では石油ストーブを使用する家が多く、ジュ（地炉）は老人のいる一部の家以外では、使用されなくなってきた。ジュは火を温めたり、茶を沸かしたり、夕飯をとるところである。ジュのある座をウチと称し、家族のくつろぐ座である。接客は前座です。以前は、ジュンファタ（地炉端）で昔の話を聞いたり、謎々をしたりした。また、産婦がお産をする部屋としても使われた。年寄りの寝室でもあった。以前は、その床は一部分が竹敷となっていた、夜間に、屋内で床下に小便ができるようになっていた。

就寝にはフッチャヤー（裏座）があてられた。男の子は、家の前方、女の子は家後方に寝かせる。新婚夫婦の寝室は家によってちがう。

メースヤーという接客用や、年寄の寝室用の別棟は、クラントー、ハタムンダーという富農家にあった。メースヤーとフンケ（本棟）とは廊下でつながっていた。

物置は、タムンヤー（薪屋）とかムヌウキと称す。豚小屋をフールと称す。昔は、風呂場はなく外で湯をわかして使用したが、夏は川で水浴びをした。

屋敷内にはたいてい、アッタイという野菜畠がある。

クラ（高倉）が数軒、残っているが、クラには往時のように米は入れていない。農具類を収めている倉庫となっている。クラの下は薪置きとしていた。クラの特徴は、釘が一本も使用されてないことや、高床で壁が斜めになっていて、ネズミが侵入できないようになっていること等であるという。キザイ（はしご段）は必ず奇数にする。現存しているクラはユチマタ（四股、四本柱）だが、昔は、より規模の大きいムチマタ（六股、六本柱）や、ヤチマタ（八股、八本柱）のクラもあったという。



写真4 クラ



写真5 クラのキザイ(はしご)

5 建築用材

山原は、山林があるので、木材には不自由しなかった。山から木を伐る時は、ウース（斧）で倒し、現場で角材に仕立ててから運び出した。大工は、それをティーン（手斧）で削って仕上げて使用した。シージャー（椎）は水に強く、大木を伐り、タイビキ（二人挽）鋸で、山で切断してきた。茅は、竹茅で部落の山野から刈ってくる。

6 家屋の構造

昔の家は、柱を土に埋めた粗末な構造のアナヤーが多かった。アナヤーのフビ（壁）とロウソク（天井張）には、竹を叩いて割って、それを編んだチヌブを用いた。ムヤヤーという構造の家は、マールーヤーとは違って、体裁もよく、長持ちする。謝名城は、材木が豊富なので、ムヤヤーが多い。

マールーヤーは、ホンカ（本棟）と台所を別棟で造り、軒と軒をシージャー（椎の木）製の樋でつなないだ。マールーヤーの場合、ゆかは板敷だが、アナヤーでは竹敷きである。

7 屋根

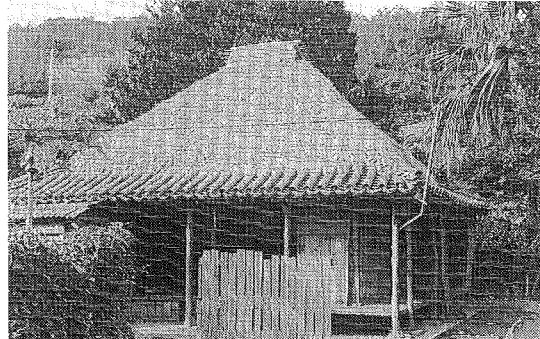


写真6 茅葺き屋根と軒瓦



写真7 茅葺き屋根と物置きのセメン瓦屋根

屋根は、竹茅葺きの寄棟が主である。軒瓦はアマダイガーラ（雨垂瓦）といわれ、50年ほど前に富豪の家から作り始めた。当時は、それをやるのは、クラヤー（綺麗な家）だった。アマダイを拡張した棟をハギヤーという。カヤヤー（茅家）で雨漏りする箇所は茅を挿して修繕する。茅葺き屋根の勾配は、ヒラ三尺に縦三尺のカニクーベ（金勾配）。瓦屋根の勾配は、ヒラ一尺に縦五寸五分。イキムシヤー（生虫屋：畜舎）は、たいていナガヤー（長屋：破風葺、切妻屋根）である。

8 茅替

家屋の普請や茅の葺替は、イーセー（助け合い、結い）で行われた。標準的な建坪は、普通十二、三坪から二十坪の広さであった。屋根に使用される茅は、一坪あたりトウカタミ（十担ぎ）分を要した。二尺周りを一束とし、六束でチュカタミ（一担ぎ）となり、一人前の男子の仕事量である。

9 大工

家普請は、部落の六十歳以下の男たちが行った。当部落は、昔から腕のいい大工職人が多かった。しかし、近頃では、茅葺き屋根を作らなくなつたために、軒の茅を綺麗に刈り上げる専門技術も見られなくなつた。その道具である、ヤバサミを、上手に使える人も、ほとんどいなくなつた。また、チヌブを編むのも専門技術が要るが、編める人は少なくなつた。

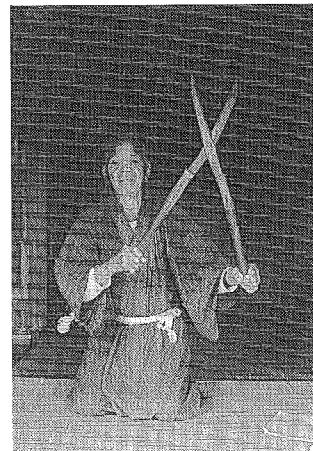


写真8 茅刈り鋏を持つ野里吉吾郎さん

10 建築儀礼

(1) チチビキ

家を建てる前にまず屋敷でヤシキビキ、チチビキ（土挽き：地鎮祭）を行う。敷地の中央で、花米一合、酒一合、線香十二本（二平）、盃を準備して、東に向かって次のように唱えて拝む。

「某々ヌ、ヤータティーンディイチ、土ビキサビークトウ、屋敷ヌウカミシ、タシキミソーチ、ヌーグウトウンネーラングトウ、タシキミソーチ、ヌーグトウンネーラングトウ、タシキミソーリ」（大意：某々が家造りをするため、地鎮祭をしますので、屋敷の神で、加護してください）

そして、フミ（干支をあてて、フミに当たる）の人が東に向かって、鍬で三回土を掘る。

(2) ヤマヌウグワン（山の御願）

建築用材を山野から採りに行く前に、仕事中の安全健康を願う。山御願をしないで、山から材木を採ったので、実際にハブに咬まれた人がいる。

根神（現在はトートゥサーが代理）と家の婦人がニガミヤーのフィヌカン（火の神）等を拝む。

<唱え言葉>

ウヌカイミソーリ、ヌーヌチュヌ、ヤーチュクインディイチ、ヤードーグトウインディイチ、山ドウマイシ、ヒートウインディチヤイビートウ、ウニゲーサビラ。

ヤマヌ、クバンクブヌウカミ、ファイジョウ、フェーヌヤマヌ、ウカミシ、タシキティ、キミソーリ。

ヌーヌ、サワイン、ネーニングトウ、ティビサチューク、ウタシキミソーチ、ウトゥルサウイミサン、ウシヌキミソーチ、ウースン、ノホギン、ハッタナン、ムッチージ、ヒートウインディイチ、ヤイビートウ、ウニゲーサビラ。ヤマヌ、フバンクブヌ、ウカミシ、ターマチヂ、マタ、シジシジクブクブヌウカミ、ファイジョウ、フェーヌヤマヌ、ウカミシ、タシキティ、キミソーリ。

ヌーヌサワイン、ネーニングトウ、ティビサ

チューク、ウタシキミソーチ、ウトゥルサ、ウイミサン、ウシヌキミソーチ、ウース、ノホギン、ハッタナン、ムッチージ、ヒートウイビート、ヌーヌサワリンネーニングトウ、ウタシキミソーリ

<訳>

お聞き取り下さい。何（干支）の人が、家造ろうとして、家道具採ろうとして、山泊まりして、木を採ろうとしておりますので、お願ひいたします。

山の、フバンクブの御神、ファイジョウ、南の山の神で、助けてください。

何の障りもないように、手足強く、お助け下さり、恐れおののくことも、押しのけて下さり、斧も、鋸も、刀も、持つていって、木採ろうしておりますので、お願ひします。

山のフバンクブの御神で、ターマチヂ、また、シジシジ、クブクブの御神で、助けて下さい。何の障りもないように、手足強く、お助け下さり、恐れおののくことも押しのけて、斧、鋸、刀も持つていって、木を伐りますので、お助け下さい。

(3) ティンダティ

工事始めの儀式。大工が、建築敷地の真ん中で、木材をおいて、手斧で三回切りつける。

(4) インニアギ

棟上げ。工事をする家の繁盛を願って、大工が棟木に塩と、米を吊るす。大工の儀式であり、昔は、何ら馳走等もつくらずに、簡素に行った。

(5) ウシヌトゥキウガン

丑の刻御願。屋根葺きの前夜、午後11時頃からその家で、女性だけで行われる拝み。部落の根神が二番座のパシグチから外に向かって座し、香炉を縁側に置いて、香をたくさん焚いて祈願する。祈願する内容は、おおむね次のようである。

<唱え言葉>「（諸々の神名を述べて）、木ヌ精、茅ヌ精ヌ御神ン、集マテイ、ファン（判）チチキミソーチ、ヤー建ティラチ、キミソーリ」

諸々の神の名を呼び、村々、マクマクの神

の他すべての神名を述べて、家を建てる前の認めの判を押して下さり、家建てさせて下さい。

線香が燃え尽きたら、供物をサンデー（お下がりをいただく）する。そして、当家の婦人が、根神に祈願してくれた札をいう。供物はファチ五皿（三つでもよい、昔は七つ）、盃七つ、酒一升、花米九合である。この祈願は女だけでやり、その家の戸主であっても男性は屋敷内に入ってはいけない。

(6) フキウガン

葺き御願。インニアギの翌日は、屋根に茅をのせ始める。大工たちが、屋根葺きにとりかかると、葺き終わらないうちに、拝みをするトートゥサー（根神）とその家の親戚の女たちが、お重のお供え物をもって、ヌルヤーに行って、マクマクのユリー（許可）をとる。ヌルヤー火ヌ神、ワハヌル火ヌ神、グスクのフガニマクの神、グスクのニーズの神、根謝銘のニーズウ神、根謝銘のユナハヌマクウ神、ハニバザーヌウ神などを拝む。

(7) イカユーエー

屋根を葺き終わり、イカ（屋根の頂）まで、葺きスピ（首尾：終了）したことを祝う。大工たちが屋根に登って、ファチ、塩、米三合を供えて拝んだのち、祝いをする。

(8) ハヤバナヌウンヌキ

ハヤバナヌキともいう。完成した日に完成祝をしないうちに、工事が無事完了したことを神々に報告し、お礼の祈願をする。この祈願は、できあがった屋内から上座（たいていは東）方向に向かって、根神等が拝む。山の神とリュウグにも祈願する。海と山は夫婦であり、木材を採った山だけでなく、海から砂も採ってきたから、リュウグウにもグフー（感謝）の祈願をする。供物の品物は、丑ヌトゥキ御願と同様である。この供物に盛った九合ウンファナ（花米）は、拝んでくれた根神に持たせることになっている。

(9) ミッカヌユーエー

家を葺いて三日の祝い。ファチ、酒、花米を供えて、ファサグチ（戸口）で拝む。ハヤ

バナウンヌキは、この日にやってもよい。今では、この祝いはやらなくなっている。

(10) ヤーウチー

家移り、引っ越し。家が完成したら、大安吉日を選んで引っ越し。チチニー（つちの日）とピニー（ひの日）はよくないので避ける。満潮時に向かって、塩と味噌をまず始めに入れ、次に火の神を入れる。分家者で、この機会に新たに火の神を仕立てる時は、事前に吉日を選んで火の神石を拾っておく。次に、仮壇、家具の順に運ぶ。ジョーイリファジミもその日に行う。（門の項参照）

11 炉と竈

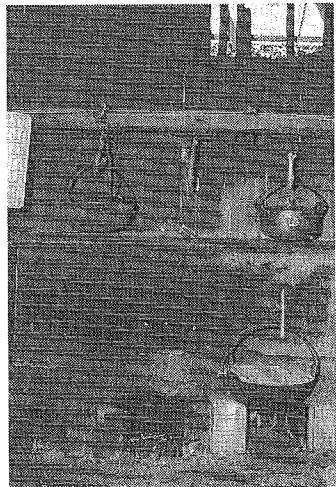


写真9 竈 ヒヌカンは中央 竈にのせてある

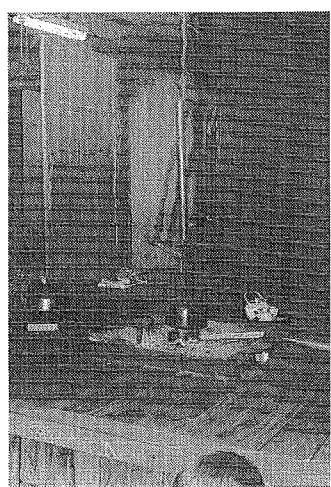


写真10 ジュ

昔の竈は、トゥヌハ（トゥルハ）という土の固まりを鼎型に並べたものであった。粘り気のある土を六、七寸位の高さに練り固めて、それを三個並べて、鍋が安定してのせられるように設置した。炉は、裏座にある。炉端はジュンファタ（地炉の端）と称し、食事をしたり、居間になっている。たいていは、老人の部屋として使用している。ジュはフッチャのほぼ中央に、三尺四方の大きさでとられ、四方を囲んで座れるようになっている。座順は、特に定まっていない。ジュの真中にはガフ（自在鉤）が吊り下がっている。その真上には、マシキという煤除け、薪置きの竹製の棚が吊られている。ジュの上の天井は取り外せるようになっていて、夏は、ガフやマシキを天井裏に収めることができる。また、ジュの上にも板を覆って、普通のゆかのようにできる。近頃は、衣服が豊かになったことや、石油ストーブなども普及したため、昔ながらのジュも蓋を覆ったまま使用していない家が多い。

12 照明

大正の頃までは、ユナビ（夜なべ）シージョーマ（するところ）は、ムチマタグラ（六股倉）の下であった。そのころは、カクドゥル（角灯籠）のもとで、夜なべをした。それ以前の、明治十二年生まれの人たちの頃までは、ウフミチマー（根謝銘ウフ道ともいい、七月ディーを踊る場所）という四辻に集まって、トゥブシ（松明）の灯りで芭蕉芋を績んだ。1964年部落経営で発電が行われて以来、電気が引かれ、集落内に街灯も点いている。

13 飲料水

謝名城は、飲料水には恵まれている。小字城の人々は、ウルンガー、ウルンガヌサー・ヌカーから、小字根謝銘はイズミガ、ハタムンダガーから汲んだが、タグ（桶）で担いで運んだ。つるべは、木やクバの葉で作ったものを使用していた。トゥングアの片隅のファンドゥーヤー（半廻屋）という小屋に瓶を3

個ほど置いて水を溜めた。1966年に簡易水道が施設された。

14 仏壇

仏壇や床は、特に腕の良い大工が造る。次図は、その一例である。

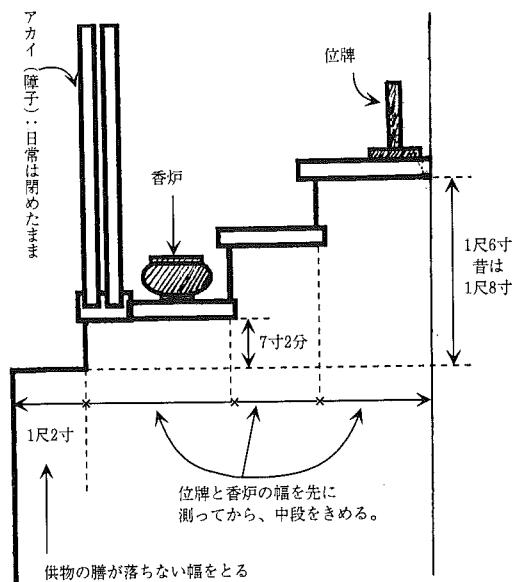


図4 仏壇の断面図

15 屋内に祀られる神

屋内には、ヒヌカン（キネヌヒヌカン：家の火の神）、中柱のある出入り口のハシグチ（走り口）、ウイートウクヌメ（上床の前）、トートーメ（仏壇、靈前）などが祀られている。毎月朔日には、火ヌ神に塩また、家によっては、シンティクアンヌル（千手観音）を祀っている。屋号をあげてみると、小字根謝銘の、アガリ、フシ、マンカー、ウルグチ、ミーゾー、小字城の、ミーヤー、ウイジョー、サーティなどである。

16 屋敷神

屋敷内に、屋敷神という名称の祠はない。しかし、祈願する場所としては、ミワ（屋敷内上手の庭）にあるミワ神や、マーヌ神（母屋の出入り口中柱前の外、東方に向いて拝む）、屋敷の四隅等がある。家で最も重要なものは中柱であるという。中柱前のマーは、子ども

が生まれた時のイジャシファジミ（出し初め・初歩き・プシアジキ）の祈願がなされる場所である。それで、生まれ年の度に、マーにて、マーヌ神ウガミが行われるのだという。マーヌ神拝みは、一月と九月に行い、マーニゲー（願い）ともよばれる。酒、花米三合、盃三つを用意して、線香を使わないで祈る。

また、屋敷拝みが行われるのは毎年十二月のシワーシウガン（師走御願）や、家普請をした時に屋敷荒れとして四十九日後や、ユタから屋敷荒れと判断されたとき等である。

17 魔除けや俗信

- (1) 旧暦8月9, 10, 11日の期間は、ヨーカビーといつて、屋敷内からブナガヤ（妖怪）ホーイン（駆逐する）といつて門のあたりで、ホウチャク（爆竹）を鳴らす。
- (2) 死者の出た家では、四十九日後に、ヒンパンの近くでヤクバレー（厄祓い）の祈願をする。
- (3) ウヌムッチー（鬼餅）の日（旧暦12月8日）には、門に鬼を払うためのメ縄を張る。門の両側に、トビラ木の枝を立てる。そして、左縄に、ムーチーを十字架に括ってつり下げるものを門に張り渡す。なぜトビラ木の枝かというと、トビラ葉はとても臭いからである。冗談で「トビラ葉ヌカバサ、アングアホヌ臭サ」と喻えられるくらいである。
- (4) 謝名城の民家の屋根には、魔除けの屋根獅子はほとんど見あたらない。
- (5) 一年以内に使者の出た家では、ウマチーの前後に、家族全員が一斉に屋外に出て、浜下りをして厄払いをする。

また、野鳥が屋内に入ったときも、厄が入ったとして、厄払いをする。特に、チクク（フクロウ）が屋内に入った場合には、ヤナグリといつて、ヤナムンを流す意味で家族が浜に泊まる。門には、竹竿をX状に交叉させて閉じて、立ち入り禁止とする。浜から戻って屋敷に入るとき、浜の砂を門に撒いて、砂を踏んで入る。また、浜からもってきた石を家に投げつける。

(6) ビジュル



写真11 ビジュル ウイグスクに登る道端

ビジュルとかビジュルンマーと呼ばれる石の神が、村落周辺や何カ所かの屋敷周辺にある。ビジュルは村（字）境界の神であるという。ビジュルは村や親族集団の共同体の御嶽などの拝所とは違い、個人が信仰する神である。ウイグスクに登っていく山道にもある。険しい石段や城への山道を登り詰めて、あと80歩程歩くと神アサギというあたりの道の右端にある。高さ26センチ、幅21.5センチ、厚さ7センチの鳥の頭のような菱形の石である。背後に黒ツグの葉を挿してあるのですぐにそれとわかる。

ビジュルは、しゃがんでいて両手で頭の近くまで何度も上げ下げすることの出来る程度の重さである。家庭や個人の悩み事や心配事があるときに、ビジュル石の前で祈願して占う。そのためか、ビジュル石を屋敷内に設置している例がある。ビジュルの拝み方は、願い事を念じて、ビジュル石を持ってみて、重く感じたら、凶、軽く感じたら吉と判断するのだという。屋号ウルグチのウルグチガー（泉井）の傍らにも、屋号ヒサンマーにもある。以前は、屋号ゴローヤーにもあったという。ゴローヤーのものは、ある時、子どもが山から拾ってきて屋敷内においていたものだが、拝めそうだといって、いつのまにか、近隣の人も拝むようになったという。

(7) ネーユイ（地震）が来たら、「チカチカ」とか、「トーチカ、トーチカ」と唱える。

(8) 雷が鳴ると「クワーギヌサードー、ダラギヌサードー」（桑木の下だぞー、ダラ木の

下だぞー）と唱えて、桑の下にかくれて難を逃れた。桑の繊維は強く、ダラ木は、山に生えているトゲのある木であるところから、雷も避けるのだろうという。

主な伝承者

（敬称略、年齢は1970年当時）

ユシジョーの平良シゲ（74歳）

城 マッサグラーの平良保進（明治33年）

城 マッサグラーの平良カナ（明治12年）

一名代 クランニーの野里吉吾郎（85歳）

一名代 タヒニーの金城ハル（73歳）

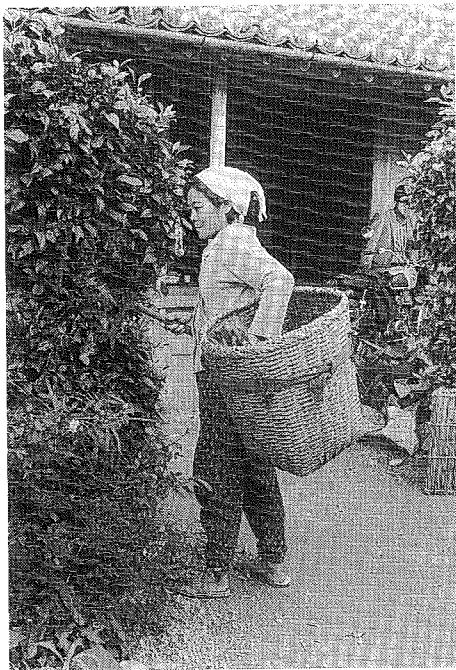


写真12

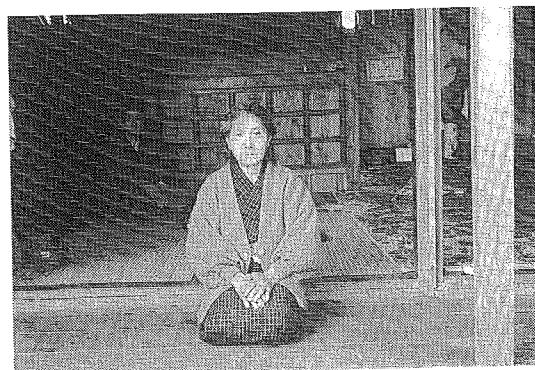


写真14

追記

本稿は、琉球大学民俗研究クラブ員として1970年1月4日から12日まで実施した調査の報告である。原稿は、1973年に部内誌の「ひんぶん7号」に収録されたが、ガリ版刷りで、少部数しか刊行されなかった。

力量不足から調査は不充分であったが、伝承内容は貴重な資料であることに変わりはない。

当時の調査にご協力いただいた謝名城の伝承者の方々には大変お世話になった。御恩返しの意味でも、活字化したいと思っていた。この機会に、調査ノートをもとに、最小限度の訂正をして、当時の写真も新たに追加してまとめなおした。



写真13